

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
49	川崎市立柿生中学校	石井 秀明

学校教育目標	今年度の重点目標	
○思考力を養う ○美しさを感じ、思いやりのある心を養う ○自主・協力の態度を養う ○健康の保持と体力の増進を図る	「伝え合い学び合い高め合うことができる生徒」 ・真理を追究し、正しく判断できる ・自他を尊重し、社会性に富む ・自主的かつ積極的に行動できる ・保健と安全の習慣を身に付けている ・学びを生かして、よりよく生きる	1確かな学力を身につける教育の推進 (知識・技能の習得) 2自らから考え、判断し、表現する力を育成する教育の推進 (思考力・判断力・表現力の育成) 3豊かな心と健やかな体を育成する教育の推進 (学びに向かう力・人間性の涵養) 4開かれた学校づくりの推進

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 確かな学力を身につける教育の推進 ・基礎基本の定着 ・学習意欲の向上 ・支援教育の充実 ・家庭学習の定着	・基礎・基本の定着を目指した「わかる授業」の実践 ・学習意欲を引き出すために端末・ICT機器を活用した授業づくりの実践 ・教師の授業力の向上を目指した授業研究の推進 ・一人一人の個性を尊重した支援教育の推進 ・信頼性と妥当性のある学習評価の研修と工夫・改善	GIGA端末の使用や活用が日常となり、様々な資料がカラーや動画になったことで、わかりやすく学べる授業が多いと感じている生徒の割合は、ここ数年で大きく数字をのばした。特に今年度は、あてはまる・どちらかというあてはまるを合わせると、9割強の生徒がわかりやすく学べる授業が多いと回答をした。保護者の方からも、9割強がわかりやすく学べる授業が多いと回答をした。	GIGA端末のさらなる活用を踏まえ、生徒がより主体的に学んでいるような授業の方法を模索したい。学習評価についても、9割前後の生徒・保護者から肯定的な回答をえることができた。指導と評価の一体化を推進し、評価基準の提示や授業内で生徒への説明を十分に行うことで、今後とも妥当性と信頼性ある学習評価を行う。不登校生徒が学年が上がるにつれ多いため、不登校支援や生徒理解の研修を増やして支援教育の理解を深める。
2 自らから考え、判断し、表現する力を育成する教育の推進 ・課題を発見し、解決を図る学習の充実 ・言語活動の充実 ・ポर्टフォリオの作成 ・協働的な学びの推進	・様々な体験活動や進路学習への取り組みを通した総合的な学習の時間の充実 ・各教科と道徳科、特別活動、総合的な学習の時間を横断的に計画し、互いに関わりながら学ぶ中の言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力の育成 ・共生＊共育プログラムを活用した社会性の育成 ・主体的で対話的で深い学びを視点とした授業改善の推進	9割以上の生徒が、学級での係活動や生徒会活動、部活動、学校行事などに、自分の役割に責任をもち、意欲的に参加していると回答しており、様々な特別活動に対して自主的に取り組む態度が育まれた。一方で学校行事や生徒会活動に生徒の意見が多く取り入れられていると感じている生徒が8割を少し下回っていることから、主体的に取り組むことができる機会の設定や実施方法の検討が必要だと考える。	話し合い活動の充実を図り、合意形成や意思決定するための支援に尽力し、また、実践、振り返り、改善を繰り返すことで、自ら考え、判断し、表現する力の育成に努める。次年度も、多くの生徒がきまりを守る規律ある学校、誰に対してもあいさつができる活気にあふれた学校づくりに努める。
3 豊かな心と健やかな体を育成する教育の推進 ・心を育てる教育の充実 ・基本的な生活習慣の定着と健康と安全に関する教育の推進 ・教育環境の整備	・生命を尊重し、思いやりの心をはぐむ道徳教育と授業研究の推進 ・時間を守り挨拶ができるといった基本的な生活習慣の定着 ・生徒一人一人が心身ともに健康で安心して学校生活が送れるような健康教育の推進 ・いじめや差別を許さない環境づくり ・校舎内外の定期的な安全点検と明るい環境づくり ・避難訓練・防災訓練の計画的な実施と安全に対する意識高揚	教員が、生徒が安心した学校生活を送れるように取り組んでいることや困っているときに支援していることは、9割以上の生徒から認知された。一方で、学校生活が楽しいかという質問に対して生徒の8%が「当てはまらない」「どちらかという当てはまらない」と回答した。今年度は、「川崎市SOSの出し方・受け止め方教育」の授業や「多様性・多様性」についての講演会を実施し、お互いに多様性を認めることや困ったときに援助を求めるとの重要性を指導した。	遅刻が多い生徒や欠席が増えた生徒に対しての生徒理解を深め、生徒の困り感を早期にキャッチしたり、相談しやすい雰囲気を作りながら、個に応じた指導をすることで、生徒が「学校には自分の居場所がある」と感じられるように一層努める。健康で安全な生活への心がけるために、ストレスに関する保健指導の時間を増やして自己理解と他者理解に努める。教員とカウンセラーの連絡相談を密にして、教育相談の内容の充実に努める。
4 開かれた学校づくりの推進 ・積極的な情報発信 ・小中連携教育の推進 ・家庭、地域との連携 ・学校評価の推進	・学校だよりやホームページ等を通した学校の教育活動に関する情報の積極的な発信 ・行事や研修、情報交換を通した小学校との交流と連携の推進 ・地域活動への積極的な参加や地域理解の推進 ・地域や保護者と協力した開かれた学校づくりの推進 ・学校評価のさらなる改善と、学校運営の活性化	「地域の行事やボランティアに参加」については、コロナ禍により参加が減少したが、今年度は感染症対策が進む中で昨年度より参加している生徒が増加した。学校でも、地域教育会議の事務局としての機能(地域教育コーディネーターの選出、事務局としても活動)や生徒会主体による地域清掃「ゴミスターズ」の再会に多くの生徒が参加するなど地域活動への参加をサポートすることができた。	「開かれた学校づくり」や「家庭への情報配信」については、ミマモルメの利用を昨年度より多く活用した。体育祭や文化祭などの学校行事に参加する保護者が年々多くなった。来年度は、授業参観の出欠席などもミマモルメやLOGOフォームを活用してより一層の連絡体制を活性化して、紙の減量に努める。
5 教職員の業務改善や働き方について	・業務改善研修 ・障害者事務支援員の活用	・業務改善研修会を定期的に行いながら、教職員間の話し合いを活発にして、日々の業務に生かした。情報機器を生かしたデータの管理や情報の伝達、勤務時間内に会議を設定しながら、会議時間の短縮、声を掛け合っの帰宅など業務改善に取り組んだ。 ・障害者事務支援員の勤務開始時刻を教職員と同じにしたことで、学校の一日の流れを確認できるようになった。障害者雇用を活用した事務支援員の制度は定着して仕事の依頼が増えた。	チャレンジド・ワークスへの仕事内容について見直し、今まで教員が行っていたすべての印刷作業の可能性を図る。支援員から教員への声掛けをすることで、今まで仕事の依頼ができなかった教員の業務内容軽減が図れるよう、依頼内容を支援員と相談する機会を増やすことで、チャレンジド・ワークスの業務内容を拡大して、教員の在籍時間短縮を図る。会議ではパソコンの活用をすすめて、印刷物の削減と会議の準備時間の削減に努める。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
・地域清掃についての活動が地域の方から評価され、どのようにすれば地域に中学生の清掃活動を伝えることができるかが課題となった。・配布された学校通信を読むことで学校行事や出来事を理解することができた。とくに合唱コンクールでの学年ごとに生徒の成長が見られ感動したという声があった。・保護者やPTAの皆様の協力でPTAバザーが開催され、大人や生徒から多くの笑顔が見ることができてよい。保護者からはここ数年生徒に話しかけることができなかつたが、たくさん生徒と会話することができてうれしかったと話していた。・自然教室を実施した、けがや病気もなく元気に学校へ戻った、行事に参加することができてよかったという声があった。	生命を尊重し、思いやりの心を育む道徳の授業を数多く実践したことで、自らから考え、判断し、表現する力や人間性の涵養が見られた。また、授業を中心にGIGA端末を有効的に活用することも定着してきたが、先生方のGIGA端末やICT機器のスキルに差があった。今後授業活用に必要研修を行い自信を持って授業できる必要性を感じた。GIGA端末の操作に慣れている生徒が多くなってきた。その一方で、情報モラルの指導の弱さがあった。来年度の課題である。今年度より吹奏楽部の地域活動への積極的な参加ができるようになった。地域の方々との交流を増やしてきた。一步一步地域理解につなげたい。支援教育のについては情報発信を丁寧に行い、生徒が居心地の良い学校環境を整える必要を感じた。